

2022年9月18日高知教会礼拝説教

松浦伝道師

説教:「埋葬されるイエス様」

聖書:ルカによる福音書 23章 50～56節

### ○埋葬されるイエス様

主日礼拝においてルカによる福音書を読み進めてきました。今ちょうど、イエス様の十字架の死の場面を読んでいます。本日一緒に読む50節以下は、小見出しにありますように、イエス様が墓に葬られたという所です。アリマタヤ出身のヨセフという人が、総督ピラトのところに出向き、イエス様の遺体を引き取ることを願い出て許可され、十字架の上で死んだイエス様を取り降ろし、亜麻布で包み、まだ誰も葬られたことのない、岩に掘った墓に納めたのです。それは彼自身が手に入れていた墓だったのでしょうか。このヨセフはユダヤ人の議員の一人だったとあります。その議会において、イエス様を死に当たるものとしてピラトに訴えることが決議されたのです。しかし彼は「善良で正しい人」で、その決議には同意していなかったとあります。つまり議会の中でおそらく彼一人が、イエス様の十字架に反対したのです。彼は「神の国を待ち望んでいた」と51節にあります。神の国、神様のご支配の完成を救いとして待ち望んでいたがゆえに、彼はイエス様の十字架に反対したのです。つまりイエス様こそ、神の国、神様のご支配という救いをもたらして下さる方だと信じていたのです。しかし結局議会においてイエス様を十字架につけるという決定を阻止することはできませんでした。それで彼はせめてイエス様の遺体を丁重に葬ろうとして、総督ピラトと交渉し、自分の新しい墓にイエス様の遺体を埋葬したのです。

この埋葬は急いで行われました。遺体を丁重に葬る場合には、香料と香油を塗り、そして布に包んで埋葬するのです。しかしイエス様の埋葬においては香料や香油を塗ることができませんでした。それは54節にあるように、安息日が始まろうとしていたからです。イエス様は午後3時ごろに息を引き取られました。ユダヤの暦では一日は日没から始まります。ですからイエス様が息を引き取られてから、翌日の安息日、つまり土曜日が始まるまでの間は、午後3時から日没までの数時間しかなかったのです。安息日が始まってしまうと、埋葬などの仕事をする事ができません。また、旧約聖書の律法には、木にかけられて死んだ人の遺体を翌日までそのままにしておいてはいけない、という掟があります。それゆえにヨセフは急いでピラトと交渉し、許可を得てイエス様を十字架から取り降ろし、亜麻布に包んだだけで埋葬したのです。

このヨセフの行為は大変勇気のある大胆なことだと言えるでしょう。ユダヤ人の議会も、また民衆も、イエス様を十字架につけることで一致していたのです。そのような中で、それに反対し、処刑されたイエスの肩を持つようなふるまいをするのは大変なことです。ユダヤ人たちから白い目で見られ、議員としての地位を失ってしまうかもしれません。つまり彼は、自分の社会的な地位や名誉を危険にさらしてまで、イエス様の遺体を丁重に葬ろうとしたのです。このことからアリマタヤのヨセフが心からイエス様を愛していたことが分かります。

けれども私たちはそこに、イエス様を愛する人間の愛の限界をもまた示されます。これほどイエス様を愛していた彼も、その十字架の死を阻止することはできなかつたし、死んでしまったイエス様を復活させることも勿論できないのです。人間にできることは、悲しみ嘆きつつ、イエス様の遺体を丁重に葬ることまでなのです。

その埋葬を、イエス様と一緒にガリラヤから来た婦人たちが見届けたと55節にあります。この婦人たちはイエス様の死の場面の最後の所にも出てきていました。49節に「イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた」とありました。彼女たちはイエス様の十字架の死を遠くから見ていたのです。そして他の見物人が帰った後もそこにずっと留まっており、ヨセフが遺体を取り降ろすのも見ており、墓にまでついて行ってその埋葬を見届けたのです。56節には彼女らが、「家に帰って、香料と香油を準備した」とあります。それは、安息日が明けたらもう一度丁寧に埋葬をやり直すためです。彼女たちもイエス様を深く愛しており、イエス様の死を嘆き悲しみ、イエス様のために何かをしたいと心から思っているのです。しかし彼女たちにおいても、出来ることは、遺体に香料を塗り、丁寧に葬るということまでなのです。

#### ○安息日において

このように本日の箇所には、イエス様の遺体が墓に葬られたことが語られています。そして小見出しが入っているので分かり難くなっていますが、56節には後半があって、もう一つのことが語られているのです。それは「婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ」ということです。これはイエス様の埋葬が行われた後、日が沈むことによって始まった土曜日、安息日の話です。イエス様の十字架の死は金曜日であり、復活は三日目の日曜日です。その間の土曜日のことが、56節後半に語られているのです。彼女たちはその日、「掟に従って休んだ」とあります。これだと、普段の安息日と変わらず淡々と過ごしたように感じられますが、決してそんなことはないと思います。彼女たちの心には、愛するイエス様の死への深い嘆き、悲しみ、絶望があったことでしょう。この安息日は、安息の日と言うよりも、むしろイエス様の死を悼み、ひたすら喪に服す日となったのだと思います。翌朝一番に香料と香油を持ってイエス様の墓に行く、そしてその遺体を改めて丁寧に葬る、その予定だけが、彼女らの心の唯一の支えだったのでしょう。

本日の箇所はこのように、イエス様の十字架の死と、三日目の日曜日の朝の復活との間の時のことを語っています。この「間の時」、イエス様を心から愛していた人々が、深い嘆き悲しみの中で遺体を墓に納め、さらに本格的に葬りをするために備えていたのです。イエス様の弟子たちはここに全く登場していません。彼らは皆逃げ去ってしまい、イエスを裏切ったのです。それゆえに、人が人に対して愛をもってできる最後のことである埋葬に弟子たちは、関わるができなかつたのです。

### ○使徒信条において

さて、十字架の死と復活の間の埋葬のことを語っている本日の箇所から、私たちはどのような神様からのメッセージを受け取ることができるのでしょうか。そこで思い起こしたいのは、私たちが毎週礼拝において告白している「使徒信条」についてです。この信条を告白することにおいて、古代の教会は、イエス様の十字架の死と復活との間に、あることを見つめてきたのです。それは何かといいますと。「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがへり。」という告白している部分です。「死にて葬られ」、これが本日の箇所における埋葬のことです。その次に「陰府にくだり」とあります。この一言が、金曜日の十字架の死と埋葬、そして日曜日の復活、その間の土曜日のことを語っていると言えるのです。つまり人間の世界では、深い嘆き悲しみの中でイエス様の埋葬がなされ、またそれを丁重にやり直すための備えがなされているその時に、イエス様ご自身は、陰府にくだっておられたのです。陰府というのは、死んだ人の行く所です。十字架で死んだイエス様は、死んだ者の所にまで行って下さったのです。そしてその陰府から、父なる神様の力によって復活させられたのです。古代の教会はそのように信じ、この信仰告白を大切に告白してきました。十字架と復活の間の土曜日はこの「陰府にくだり」の日であると言えるのです。

### ○ハイデルベルク信仰問答において

しかしイエス様がこのように陰府にまで、死者の国にまで降って下さったということにはどのような意味があるのでしょうか。それによって私たちにどのような恵みが与えられるのでしょうか。そのことを、『ハイデルベルク信仰問答』ではこのように説明されています。問44「なぜ『陰府にくだり』と続くのですか」という問いへの答えです。「それは、わたしが最も激しい試みの時にも次のように確信するためです。すなわち、わたしの主キリストは、十字架とそこに至るまで、御自身もまたその魂において忍ばれてきた言い難い不安と苦痛と恐れとによって、地獄のような不安と痛みからわたしを解放してくださったのだ、と」。

ここに語られているのは、十字架にかかって死んだイエス様が、陰府という特別な場所に行ってそこで何かをなさった、ということではありません。「陰府にくだり」という使徒信条の言葉は、主イエス・キリストが、十字架の死において、「言い難い不安と苦痛と恐れ」を、言い換えれば「地獄のような不安と痛み」を、肉体においてのみならず魂において引き受け、忍んで下さったことを語り示しているのだ、ということです。つまり言い換えれば、神の独り子、まことの神であられる主イエス・キリストが、天から降ってきて私たちと同じ人間になり、私たちの罪を全て背負って十字架の苦しみと死とを引き受けて下さった、そのイエス様の徹底的なへりくだりを言い表しているのが、「陰府にくだり」という言葉なのだ、ということです。そしてイエス様がこのように「言い難い不安と苦痛と恐れ」を受けて下さったことによって、私たちが、「地獄のような不安と痛み」から解放される、そういう救いが実現したのです。私たちがそのことを、「最も激しい試みの時にも」確信するために、イエス様が陰府に

くだられたことを使徒信条は語っている、それが『ハイデルベルク信仰問答』における「陰府にくだり」の解説なのです。

#### ○深い嘆きと絶望の時にも

私たちもこの理解に立って、ルカによる福音書に示されています。金曜日のイエス様の十字架の死と、日曜日の復活との間の土曜日、安息日のことを語っていることの意味をも受け止めたいと思います。この土曜日、安息日は、深い嘆きと悲しみと絶望の日です。イエス様を心から愛し、ガリラヤからはるばる従って来ていた婦人たちが、イエス様の十字架の死を嘆き悲しんでいます。復活の喜びはまだ与えられていません。彼女たちは亡くなったイエス様のために何かをしたいと心から願っていますが、出来ることはその埋葬を見届けることだけであり、せめて丁重に、心をこめて、その遺体をもう一度埋葬し直すことだけを唯一の望みとしてこの一日を過ごしたのです。それは望みとは言えないような望み、絶望に支配されている中での、せめてもの喜びだったと思います。この言い難い地獄のような苦しみ悲しみ嘆きを、主イエス・キリストが、苦しみをその身に受け、人によって十字架につけられ、死にて葬られ、陰府に降ったことによって、ご自身の身に背負い、担い、すべて引き受けて下さったのです。イエス様の救いのご計画のすべては、私たちには理解することはできないかもしれません。ですが、復活して今も生きておられるイエス様は、私たちをこれほどまでに愛して下さっているという恵みは、この私たちに今も降り注いでいるのです。

#### ○永遠の約束

十字架の金曜日と復活の日曜日。その間にはさまれた土曜日。この日のイエス様は、私たち人間には何もしていないように見えるかもしれませんが、「イエス様は陰府に下っておられたのです。そこで既に陰府に下った者たちに宣教しておられたのです。」イエス様の福音の恵みはこんなにも大きくて、深いものなのです。私たちは目に見えることしか分からないし、信じようとしません。イエス様の働きに対しても同じなのです。十字架と復活という明らかな出来事によって、私たちはイエス様が誰であるか、何をしてお下さったかを知るのです。しかし、それが全てではないのです。私たちが知らない所においても、イエス様は私たちの救いの為に働いて下さっているということなのであります。何もなかったかのように見える土曜日。しかし、その日は何もなかった、何も起きなかった、そうではないのです。それはちょうど、イエス様が乙女マリアから生まれる前から、天地創造の時からイエス様は天の父なる神様と共におられ、今も天の父なる神様の右に座しておられるのと同じです。たとえ見えずとも、イエス様は生きて働き、父なる神様と共に、その救いの御業を遂行しておられるのです。

私たちの全ては、天の父なる神様とこの主イエス・キリストの御手の中にあるのです。それは、私たちが生きるにしても、死んだとしても、変わることがないことなのです。私たちは生きている間だけ、神様の御手の中にあるのではないのです。神様とイエス様との永遠の関係は、死を超えて、変わることなく私たちの上にはり続けるのです。そのことが分かるな

らば、私たちの親や先祖たちも、愛する者達も、たとえイエス様を知らずに死んだとしても、彼らも又、全てを支配してくださっておられる父なる神様と御子イエス・キリストの御支配の中にあることに変わりはありません。私たちはそのことをイエス・キリストの御名によって信じて良いのです。主に感謝しましょう。

○祈り